

日蓮大聖人御書全集

ほんいんみょうしょう

本因妙抄

新版
2219
ゝ
2228

ほんいんみようしやう

本因妙抄

ほつけほんもんしゆうけつみやくそうじやう こと

法華本門宗血脈相承の事

ほんいんみよう ぎやうじやにちれん しる

本因妙の行者日蓮これを記す。

よ げゆう し でんぎやうだいし しやうさいしじゆうにさい おんとき ぶつりゆうじ
予が外用の師・伝教大師、生歳四十二歳の御時、仏立寺
てんだいさんぶつろうじ だいかしやう あ たてまつ ぎどう らっこ しやうじ

いちだいじ ひほう けつ ひ だいとう ていげんにじゆういちねんたいさい
〈天台山仏隴寺〉の大和尚に値い 奉り、義道を落居し生死

一大事の秘法を決したもうの日、大唐の貞元二十一年太歳
きのととりごがつみつか さんだいしやうしよ つた おのおのしちめんしちじゆう くけつ

乙酉五月三日、三大章疏を伝え、 各七面七重の口決を

じじやう たま

もつて治定し給えり。

げんぎしちめん けつ しやうしやく ごじゆうれつみやう やく

いわゆる玄義七面の決とは、 正釈の五重列名に約して

けつ

決したもう。

いち えみようはんぎ いちめん

一に依名判義の一面。

みよう ほう ぶんい せせつ たい さいしゅ ぎ

名とは法の分位において施設。体とは宰主を義となす。

しゅう しょさ くきよう じゅじほんいん しょさ よ くしょうほんが

宗とは所作の究竟なり。受持本因の所作に由つて口唱本果

くきよう う ゆう しょうたい ほんいんほんが うえ く のう とくぎよう

の究竟を得。用とは証体の本因本果の上の功能・徳行な

きよう かい ぎ かい ほん しゃく しゃく

り。教とは誠を義となす。誠とは本のための迹なれば、迹

すなわ うみようむじつ むとくどう じつそう みようだい ほんじやくおな

は即ち有名無実・無得道なるを、実相の名題は本迹同じ

ほんじやくいっち しゆい おお いまし

ければ、本迹一致と思惟すべきことを大いに誠めんがた

さんしゅ きようそう た しゅ じゆく だつ ろん ふろん た

めに、三種の教相を起てて種・熟・脱の論・不諭を立つ

きようもん げしやくめいはく

もんもんくく

るものなり。経文・解釈明白なり。かくのごとく、文々句々

みよう みようしよう じんぎ ほんじやくしようれつ ほしい あらわ たも

の名、妙正の深義、本迹勝劣の本意を顕し給うもの

てんだい でんぎよう ごぐつつう

なり。しかりといえども、天台・伝教の御弘通は、ひとえ

り うえ ほつそう しゃつけ ふぞく ぞうほう りい かんぎようごほん

に理の上の法相、迹化の付嘱、像法の理位、観行五品の

きようしめ しゃく おもて しゆ すく ほん かく うち

教主なれば、迹を表となして衆を救い、本を隠して裏に

もち じんじんじんじん ひ ひ

用いるものなり。甚深甚深、秘すべし秘すべし。

に ぶつ い きじよう に い いちめん

二に仏意・機情の二意の一面。

ぶつ い かんぎよう そうじ ほん きじよう りそく みようじ ほん

仏意は観行・相似を本となし、機情は理即・名字を本と

たいゆう はな たいゆう ほつけ しんち よ

なす。いずれも体用を離れず。体用は法華の心智に依つて

いちだいごじ しだい せんじん かいたく つぎ きじょう だいとうけちえん

一代五時の次第・浅深を開拓す。次に機情とは、大通結縁の

しゆ しみ じょうよう もう ほつけ らいにゆう ほんじやくにもん

衆のために四味の調養を設けて法華に來入す。本迹二門

ないしもんもんくく にい ふんべつ

乃至文々句々、この二意をもつて分別すべきものなり。

さん しじゅうせんじん いちめん

三に四重浅深の一面。

みよう しじゅうあ いち みようたいむじょう ぎ にぜん しよきよう

名の四重有り。一には名体無常の義。爾前の諸經・

しよしゅう に たいじつみようけ しゃくもん しかく むじよう

諸宗なり。二には体実名仮。迹門は始覺にして無常なり。

さん みようたいくじつ ほんもん ほんがく じょうじゅう し

三には名体俱実。本門は本覺にして常住なり。四には

みようたいふしぎ かんじんじきだつ なんみようほうれんげきよう たんねんい

名体不思議。これ觀心直達の南無妙法蓮華經なり。湛然云

だつ げん あ ほんしゆ あ うんぬん

わく「脱は現に在りといえども、つぶさに本種を騰ぐ」云々。

つぎ たい しじゅう いち さんたいきやくりやく たい にぜんごんきよう

次に体の四重とは、一に三諦隔歴の体。爾前權教なり。

に りしようえんゆう たい しやくもんじゅうしほん さん さんぜんほんぬ たい

二に理性円融の体。迹門十四品なり。三に三千本有の体。

ほんもんじゅうしほん し じしようふ しぎ たい わ ないしよう じゅうりようほん

本門十四品なり。四に自性不思議の体。我が内証の寿量品、

じぎよう いちねんさんぜん

事行の一念三千なり。

つぎ しゅう しじゅう いち いんがいしよう しゅう ほうべんごんきよう

次に宗の四重とは、一に因果異性の宗。方便權教なり。

に いんがどうしよう しゅう しやくもん さん いんがびようじよう しゅう

二に因果同性の宗。これ迹門なり。三に因果並常の宗。

すなわ ほんもん し いんがいちねん しゅう もん い けに こころ

即ち本門なり。四に因果一念の宗。文に云わく「介爾も心

あ すなわ さんぜん ぐ すなわ まっぼうじゆんえん けつちよう

有らば、即ち三千を具す」。これ即ち末法純円の結要

ふぞく みようほう うんぬん

付嘱の妙法なり云々。

つぎ ゆう しじゅう いち じんずうげんけ ゆう こんきよう いぜん あ
次に用の四重とは、一に神通幻化の用。今経已前に明か

すところの仏菩薩、出仮利生のことなり。二に普現色身の用。

すなわ いっしん なか じっかい ぐ ほんじやくいちだい

即ち一身の中において十界を具することなり。本迹一代

ごじ わた さん む さじようじゆう ゆう しょうどうはつそうあ む さじざい

五時に亘る。三に無作常住の用。証道八相有り。無作自在

し いっしん けゆう こしん と とう

のことなり。四に一心の化用。「あるいは己身を説く」等な

り。

つぎ きよう しじゆう いち たんけんきやくり きよう ごん しょう

次に教の四重とは、一には但願隔理の教。権・小なり。

に きようそくじつり きよう しゃくもん さん じしようえちゆう きよう

二には教即実理の教。迹門なり。三には自性会中の教。

おうぶつ ほんもん し いっしんほうかい きよう じゆりようほん もん そこ

応仏の本門なり。四には一心法界の教。寿量品の文の底の

ほうもん じじゆゆう ほう しん によらい しんじつ ほんもん くおん いちねん

法門、自受用報身如來の眞實の本門、久遠一念の

なんみようほうれんげきよう

だつ げん あ

南無妙法蓮華經なり。「脱は現に在りといえども、つぶさに

ほんしゆ あ しょうれつ

本種を騰ぐ」の勝劣これなり。

だいし はちじゆうせんじん いちめん

第四に八重淺深の一面。

みよう はちじゆう いち みようたいようべつ みよう に みようたいふり

名の八重とは、一に名体永別の名。二に名体不離の

みよな さん じゆうたいるしゆつ みよう し みようたいぐそく みよう ご ほんぶん

名。三に従体流出の名。四に名体具足の名。五に本分

じようじゆう みよう ろく かかいみようしよう みよう しち むそうふしぎ みよう

常住の名。六に果海妙性の名。七に無相不思議の名。

はち じしようここ みよう ないしきようし うんぬん もん まか いゆい

八に自性己々の名。乃至教知るべし云々。文に任せて思惟

すべきなり。

だいご げんじゅうとうもん いちめん

第五に還住当文の一面。

し はち せんじん ほんじやくしようにれつ し

四・八の浅深をもつて本迹勝劣を知るべし。

だいろうく たんにゆうこしん いちめん

第六に但入己心の一面。

はじ だいほうとうぜん だいじゆう はんぎよう いた もん しょうき

始め「大法東漸」より第十の判教に至るまで、文の生起

さいお いっこう しんり しょうれつ い しょうい じよう

を閣いて一向に心理の勝劣に入れて正意を成ずべし。謂

だいほう すなわ ぎようじゃ こしん いみよう うんぬん しゃく

わく、大法とは、即ち行者の己心の異名なり云々。釈の

こころ もんぎ こうはく はな しゆだい り もつぱ しゃく たも

意は、文義の広博を離れて首題の理を専らにすと釈し給

うなり。

だいしち しゆつりしように いちめん

第七に出離生死の一面。

こころ

いちだいおうぶつ

じゆりようほん

しやく

ないしよう

じゆりようほん

心は、一代応仏の寿量品を迹となし、内証の寿量品

ほん

しやくそん

く おん みようじそく

み

くらい

やく

を本となし、釈尊の久遠名字即の身と位とに約して

なんみようほうれんげきよう

とな

たてまつ

しゆつりしようじ

いちめん

な

南無妙法蓮華経と唱え奉る、これを出離生死の一面と名

ほんじやく

み

やく

くらい

やく

しやく

おも

づく。「本迹は身に約し位に約す」の釈、これを思うべ

いじよう

きものなり已上。

げんもんお

玄文畢わんぬ。

もんぐしちめん

けつ

いち

えみよう

いちめん

ぎ

かみ

文句七面の決とは、一に依名の一面。その義、上のごと

に

かんのう

いちめん

さんじぐきよう

わた

にぜん

しやくもん

し。二に感応の一面。三時弘経に亘るべし。爾前・迹門の

しょうぞうにせんねん

ぐきよう

かんのう

ほんもん

まつぼうぐつう

かんのう

正像二千年の弘経の感応より本門の末法弘通の感応は

しんじつしんじつすぐ

さん

しきよう

いちめん

し

ごじ

いちめん

ご

真実真実勝るるなり。三に四教の一面。四に五時の一面。五

ほんじやく

いちめん

ろく

たいゆう

いちめん

しち

にゆうこしん

いちめん

に本迹の一面。六に体用の一面。七に入己心の一面。こと

みな

こころさき

おな

ちいだいし

でん

げんぎ

もんぐ

ごとく皆、その心前に同じ。智威大師の伝には、玄義・文句

りようぶ

にぜん

しやくもん

おのおのさんじゆうじゆう

せんじん

くけつ

の両部には爾前・迹門に各三十重の浅深をもつて口決

たま

でんぎようだいし

しちめん

けつ

し給えり。つぶさには伝教大師の七面の決のごとし。

まかしかんいちぶ

じゅうじゅうけんかん

た

つう

たま

また摩訶止観一部には十重顕観を立ててこれを通じ給

えり。

いち

たいきようりゆうかん

にぜん

ほん

しやく

さんぎよう

は

ふ

しぎ

一は待教立観。爾前・本・迹の三教を破して、不思議

じつり みようほうれんげきよう かん た もん い えんどん はじ
実理の妙法蓮華經の觀を立つ。文に云わく「円頓は初めよ
じつそう えん うんぬん しやくもん りぐ いちねんさんぜん い だつちやく
り実相を縁ず」云々。迹門を理具の一念三千と云う。脱益
ほつけ ほんじやくとも しやく ほんもん じぎよう いちねんさんぜん い
の法華は本迹共に迹なり。本門を事行の一念三千と云う。
げしゆ ほつけ どくいち ほんもん ふしぎじつり みようかん
下種の法華は独一の本門なり。これを不思議実理の妙觀と
もう
申すなり。

に はいきようりゆうかん こころ ごんきよう しやくしゆう す
二に廃教立觀。心は、權教ならびに迹執を捨てて
ほんもんしゆだい り と じぎようもち
本門首題の理を取つて事行に用いよとなり。

さん かいきようけんかん もん い いつさいしよほう もと ぶつぼう
三に開教顯觀。文に云わく「一切諸法は本よりこれ仏法
さんたい り ぐ な ぶつぼう
なり。三諦の理を具するを名づけて仏法となす。いかなぞ

きよう のぞ うんぬん もん こころ かんぎようりかん いちねんさんぜん かい

教を除かん」云々。文の意は、観行理観の一念三千を開し

みようじじぎよう いちねんさんぜん あらわ だいし じんい しゃくそん じひ

て、名字事行の一念三千を顕す。大師の深意、釈尊の慈悲、

じようぎようしよでん ひきよく

上行所伝の秘曲これなり。

し えきようけんかん きようそう ほつけ す かんじん ほつけ しん

四に会教顕観。教相の法華を捨てて観心の法華を信ぜよ

となり。

ご じゆうふ しぎけんかん もん い り ぞうさ

五に住不思議顕観。文に云わく「理は造作にあらざるが

ゆえ てんしん い しょうち えんみよう ゆえ どくろう い

故に『天真』と曰い、証智は円明なるが故に『独朗』と云

うんぬん しゃく こころ くしょうしゆだい り ぞうさな こんにちじゆくだつ

う」云々。釈の意は、口唱首題の理に造作無し。今日熟脱

ほんじやくにもん しゃく くおんみようじ ほんもん ほん しんじん

の本迹二門を迹となし、久遠名字の本門を本となす。信心

ごうじよう

よねんな

なんみようほうれんげきよう

とな

たつまつ

強盛にして、ただ余念無く南無妙法蓮華經と唱え奉れば、

ぼんしんそくぶつしん

てんしんどくろう

そくしんじようぶつ

な

凡身即仏身なり。これを天真独朗の即身成仏と名づく。

と

いい

ぜんだい

ほうもん

し

ひと

あ

問うて曰わく、前代にこの法門を知れる人これ有

こた

いい

あ

もと

いい

たればと

りや。答えて曰わく、これ有り。求めて云わく、誰人ぞや。

しめ

いい

しやくそん

たず

いい

ほとけ

のぞ

示して云わく、釈尊これなり。尋ねて云わく、仏を除き

たてまつ

よ

し

にんし

ろんじあ

こた

いい

奉って、余にこれを知れる人師・論師有りや。答えて曰わ

てんだいい

てんじん

りゆうじゆ

ないかんれいねん

げちやくじぎ

てんじん

く、天台云わく「天親・竜樹、内鑑冷然、外適時宜（天親・

りゆうじゆ

うち

かんが

れいねん

そと

とき

よろ

かな

竜樹、内に鑑みるに冷然にして、外には時の宜しきに適

こんにち

なんみようほうれんげきよう

なんかく

てんだい

みようらく

でんぎよう

う」。今日の南無妙法蓮華經は、「南岳・天台・妙楽・伝教、

ないかんれいねん げちやくじぎ ないかんれいねん げちやくじぎ しゆぎよう

内鑑冷然、外適時宜」なり。「内鑑冷然、外適時宜」の修行

ひ ほんじやくいっち うち むち きら えんどん はじ

の日は本迹一致なり。有智無智を嫌わず、「円頓は初めよ

じつそう えん り ぞうさ ゆえ てんしん い

り実相を縁ず」「理は造作にあらざるが故に『天真』と曰い、

しょうち えんみよう ゆえ どころろ い い りい

証智は円明なるが故に『独朗』と曰う」と云つて、理位

かんぎよう おもむ りやく まつぼう とき たも

観行に趣かしめて利益をなし、末法の時を待つものなり。

ゆえ てんだい とうじだいりやく う のち

故に天台云わく「ただ当時大利益を獲るのみにあらず。後の

ごひやくさい とお みようどう うるお うんぬん てんだい しょうあん みようらく

五百歳、遠く妙道に霑わん」云々。天台・章安・妙楽・

でんぎようとう だいしよう ないしよう ほんじやくしょうれつ げゆう ほんじやくいっち

伝教等の大聖は、内証は本迹勝劣、外用は本迹一致な

ゆえ きようそう かんじん そうじ かんぎよう げりよう にんし

り、その故は、教相も観心も相似・観行の解了の人師に

して、時機じきまた像法ぞうぼうなり。付嘱ふぞくは即ち妄授すなわ余人もうじゆよにん、御身おんみもま

た迹化しやつけの衆しゆたる観音かんのん・妙音みようおん・文殊もんじゆ・薬王やくおうとう等の化身けしんなり。今いま、

末法まつぼうは、本化ほんけの薩埵さつたたる上行じようぎようとう等の出世しゆつせの境きようにして、本門ほんもん

流宣るせんの時剋じこくなり。何ぞ理觀なんを用いて事行りかんを修せざらんや。予よ

が所存しよぞんは内証ないしよう・外用げゆうとも共に本迹勝劣ほんじやくしいうれつなり。もし本迹一致ほんじやくいっちと

修行しゆぎようせば、本門ほんもんの付嘱ふぞくを失うしなう物怪もつけなり。

本迹ほんじやくの不同ふどうは処々しよしよにこれを書しよす。しかりといえど

も、宿習拙しゆくじゆうつたなき者もの、本迹ほんじやくに迷倒めいとうせんか。もし本迹勝劣ほんじやくしいうれつを

知らずんば、未来みらいの悪道あくどうもつと最も不便ふびんなり。宿業しゆくごうを恥はじず、還かえ

よ うら 　わ で し とう なか てんだい でんぎよう
つて予を恨むべきか。我が弟子等の中にも、天台・伝教の

げりよう りかん い ほんじゃく いちおうしようれつ さいおういっち

解了の理観を出でず、本迹について「一往勝劣、再往一致」

みようぎ そんな じた めいわく じよう しゆくじゆう

の謬義を存して自他を迷惑せしめんの条、宿習のしから

えんぶだいだいいち ひじ まんねん

しむるところか。閻浮提第一の秘事たりといえども、万年

しる とど わ みらい

救護のためにこれを記し留むるものなり。我が未来におい

よ ぶつぽう やぶ いっさいしゆじよう がんばん たいせき

て、予が仏法を破らんがために、一切衆生の元品の大石、

だいろくてん まおう し ししんちゆう こうちゆう な な にちれん か

第六天の魔王、師子身中の蝗虫と成つて、名を日蓮に仮り

ほんじゃくいっち じゃぎ もう い おお しゆじよう まさ

て本迹一致という邪義を申し出だして、多くの衆生を当

あくどう ひ どうしん あ もの かれ じゃし す

に悪道に引くべし。もし道心有らん者は、彼らの邪師を捨て

て、よろしく予が正義に随うべし。正義とは、本迹勝劣ほんじやくしやうれつ

の深秘、具騰本種の実理なり。日蓮一期の大事なれば、弟子でし

等にも朝な夕なに教え、また一期の所造等、ことごとくこ

の義なり。しかりといえども、迹執を出でず、あるいは軽

《見惑》、あるいは蔑《思惑》、あるいは癡《塵沙惑》、ある

いは迷《無明惑》、故に日蓮が立義を用いざるか。予が

教相・観心は、理即・名字、愚悪・愚見のためなり。

日蓮は名字即の位、弟子檀那は理即の位なり。

上行所伝の結要付嘱の行儀は、教観判乗、皆名字即に

ごみ しゅ しゅぎよう

ゆえ

きようそう

しだい

ようゆう

して五味の主の修行なり。故に、教相の次第は要用によ

たいこう そんな

とき

よ

もうもく

こと

かれ

るべし。ただ大綱を存する時は、余は綱目を事とせず。彼は

もうもく

たいこう

かれ

もうもく

きようそう

しゅ

たいこう

綱目、これは大綱なり。彼は綱目の教相の主、これは大綱・

しゅだい

しゅ

おそ

にちれん

ぎようぎ

てんだい

でんぎよう

およ

首題の主なり。恐らくは、日蓮の行儀には天台・伝教も及

たし

ぎようぎ

ざいせ

ばず。いかにいわんや他師の行儀においてをや。ただ在世

はちかねん

ぎしき

うつ

めつごまつぼう

ぎようぎ

八箇年の儀式を移して滅後末法の行儀となす。しかりとい

ほとけ

じゆくだつ

きようしゅ

それがし

げしゅ

ほつす

か

えども、仏は熟脱の教主、某は下種の法主なり。彼の

いっぽんにはん

しやりほつとう

かんじん

われ

ぼんぷ

一品二半は、舍利弗等のためには観心たり、我ら凡夫のた

きようそう

りそく

たんもう

ぼんぷ

かんじん

よぎよう

めには教相たり。理即・短妄の凡夫のための観心は、余行

わた

なんみようほうれんげきよう

に渡らざる南無妙法蓮華經これなり。

じんぎ

し

びやくにんしゅつたい

よ

かくのごとき深義を知らざる僻人出来して、予

りゆうぎ

きようそうはずれ

おも

みな

しゆくごう

が立義は教相辺外と思うべきものなり。これらは皆、宿業

つたな

しゆいんかんか

しごく

か

てんだいだいし

の拙き修因感果の至極せるなるべし。彼の天台大師には

さんぜんにん

でしあ

しょうあんいちにんろうねん

でんぎようだいし

三千人の弟子有つて、章安一人朗然たり。伝教大師は

さんぜんにん

しゆと

お

ぎしんいご

な

いま

三千人の衆徒を置く。義真已後はそれ無きがごとし。今、

すうはい

でしあ

ぎしんな

もつてかくのごとし。数輩の弟子有りといえども、疑心無く

しょうぎ

つた

もの

まれ

いち

に

こいし

ひ

正義を伝うる者は希にして、一・二の小石のごとし。秘す

ほうもん

べきの法門なり。

だいろく じゅうきようけんかん しち じゅうきようひかん はち ふきようけんかん く

第六に住教顕観。七に住教非観。八に覆教顕観。九に

じゅうきようけんかん じゅう じゅうかんゆうきよう ごじゅう かみ ごじゅう

住教用観。十に住観用教。この五重は上の五重のごと

しゆい

し。思惟すべし。

と い ほんじやくこと

問うて云わく、「本迹殊なりといえども、不思議一

ほんじやく きよう べつ ふしぎ かんり あらわ

なり」本迹の教において別して不思議の観理を顕すが

ゆえ うんぬん きじよう やく ほんじやく くごん こと あ

故に云々。機情に約すれば、本迹において久近の異なり有

いちおう せんぎ ないしよう やく ろん

るべし。これ一往の浅義なり。内証に約してこれを論ずれ

しやうれつあ さいおう じんぎ ふしぎいち うんぬん

ば、勝劣有るべからず。再往の深義は不思議一なり云々。

こころう

いかんが意得べけんや。

こた

い

じゅうきようけんかん

ぼんのうそくぼだい

答えて云わく、住教顕観は煩惱即菩提、

じゅうきようひかん

ほつしようじやくねん

ふきようけんかん

みようじはんぎよう

じゅうきようゆうかん

住教非観は法性寂然、覆教顕観は名字判教、住教用観

ふしぎいち

じゅうかんゆうかん

いけんみようえん

もう

だいじ

は不思議一、住観用教は以顕妙円と申す大事これなり。

きようかんふしぎ

てんねんほんしよう

ところ

とくいちほうかい

みようかん

た

教観不思議・天然本性の処に独一法界の妙観を立つ。

ふしぎ

ほんじやくしようれつ

い

ぜつだいふしぎ

ないしよう

これを不思議の本迹勝劣と云う。また絶待不思議の内証、

ふかとく

ごんごどうだん

しようれつ

てんだい

みようらく

でんぎよう

のこ

不可得・言語道断の勝劣は、天台・妙楽・伝教の残すと

わけ

ひみつ

かんじんじきだつ

しようれつ

しやく

な

ころ、我が家の秘密、観心直達の勝劣なり。迹という名あ

うみようむじつ

ほんむこんぬ

しやくもん

じつ

ふしぎ

りといえども、有名無実・本無今有の迹門なり。実に不思議

みようほう

じゅうりようほん

かぎ

ゆえ

ふしぎいち

しやく

の妙法はただ寿量品に限る。故に不思議一と釈するなり。

しやくもん みようほうれんげきよう だいごう ほんもん に

迹門の妙法蓮華經の題号は本門に似たりといえども、

ぎり てんち へだ じようぶつ すいか ふどう くおんみようじ

義理、天地を隔つ。成仏また水火の不同なり。久遠名字の

みようほうれんげきよう く きが ゆえ あらわ いち

妙法蓮華經の朽ち木書きなる故を顕さんがために一と

しやく まつがく ぎもう のこ にちれん りようぜんえじよう

釈するなり。末学、疑網を残すことなかれ。日蓮、靈山会上

たほうとうちゆう まのあた しやくそん ちよくじゆ たてまつ ひほう

の多宝塔中において、親り釈尊より直授し奉る秘法

じんじんじんじん ひ ひ つた つた

なり。甚深甚深、秘すべし秘すべし、伝うべし伝うべし。

ま か しかん しちめん くけつ えみようはんぎ ふもんがんに じやくししよう

摩訶止觀の七面の口決とは、依名判義、附文元意、寂照

いっそう きようぎようししよう ろく く にしき ぜっしよしりよ しゆつりししようじ いちめん

一相、教行証、六・九の二識、絶諸思慮、出離生死の一面

いじよう

なり已上。

でんぎよう

いつさいしよほう

もと

このかた

ふしようふめつ

しようそ

《伝教》

「一切諸法は本より已来、不生不滅にして性相

ぎようねん

しやか くち

と

しんじ

ぜつごん

うんぬん

凝然たり。

釈迦は口を閉じ、身子は絶言す」云々。これは

しやくもん

てんだい

しかん

ないしよ

ほんもん

にちれん

しかん

迹門たる天台の止観の内証なり。

本門たる日蓮の止観は、

しやか くち ひら

もんじゆ

ごんご

しやくもん

ふ

しぎふかせつ

ほんもん

釈迦は口を開き、文殊は言語す。迹門は不思議不可説、本門

ふ

しぎかせつ

しようこ

しやく

は不思議可説の証拠の釈これなり。

さんだいぶ

いちどうじゆうい

しどうろくい

あ

でんぎよう

また三大部において一同十異・四同六異これ有り。伝教、

ぶつりゆうじ

くけつ

いちどう

みようどう

じゆうい

仏立寺よりこれを口決す。一同とは、名同なり。十異とは、

みようどうぎい

しよえい

かんじんい

ぼうしよ

ゆうきよ

たいきい

名同義異・所依異・観心異・傍正異・用教異・対機異・

けんぼんりい

しゆぎようい

そうじようい

がんしい

しどう

みようどう

顕本理異・修行異・相承異・元旨異なり。四同とは、名同・

ぎど^う しよえど^う しよけんど^う ろく^い しやく^い たいこうもうもく^い
義同・所依同・所顕同なり。六異とは、釈異・大綱綱目異・
ほんまつ^い かんじん^い きようないげかん^い じぎようけたい^い
本末異・観心異・教内外観異・自行化他異これなり。今、
よう^い しゃく^い ほん^{かんじん} どうみよう^い ぎ^い
要をもつてこれを言わば、迹・本・観心、同名異義なり。
しじゆう^{ほんまつとも} しゆぎよう^{かくど^う} じき^{かん^{のう}} みなし^{ようれつ}
始終・本末共に、修行も覚道も、時機も感応も、皆勝劣な
り。

しも^{にじゆうしばんし^{よう}れつ} か^{ほんもん} わ^{しやくもん} か^か
この下、二十四番勝劣なり。彼の本門は我が迹門。彼の
しょう^{れつ} か^{じんぎ} よ^{せんぎ} か^{じんり} せん^り
勝はこの劣。彼の深義は予が浅義。彼の深理はこの浅理。
か^{ごく^い} せん^い か^{ごつ^か} しよしん^か かんじん^{かんじん}
彼の極位はこの浅位。彼の極果はこの初心。彼の観心はこ

きようそう

かれ たいせい

くに

しゅつしょう

につてん

くに

しゅつせ

の教相。彼は台星の国に出生し、これは日天の国に出世

かれ

やくおう

じようぎよう

かれ

げりよう

き

り

す。彼は薬王、これは上行。彼は解了の機を利し、これ

ぐあく

き

やく

かれ

ぐつう

たいせいしよご

こうれい

は愚悪の機を益す。彼の弘通は台星所居の高嶺なり、この

ぐきよう

にちおうのうじゆう

こうほう

かれ

じようき

おし

げき

弘経は日王能住の高峰なり。彼は上機に教え、これは下機

おし

かれ

いちぶ

ほんぞん

しちじ

ほんぞん

に訓う。彼は一部をもつて本尊となし、これは七字を本尊と

かれ

そうだいかいえ

おもて

ぜつだいかいえ

おもて

なす。彼は相待開会を表となし、これは絶待開会を表と

かれ

じゆくだつ

げしゆ

かれ

しゆき

えんどん

なす。彼は熟脱、これは下種。彼は衆機のために「円頓は

はじ

じつそう

えん

しめ

まんき

初めより実相を縁ず」と示し、これは万機のために

なんみようほうれんげきよう

すす

かれ

あつく

おんしつ

おんとうるざい

南無妙法蓮華経と勧む。彼は悪口・怨嫉、これは遠島流罪。

かれ いちぶ どくじゆ

にじ よ

あ

彼は一部を讀誦すといえども二字を讀まざること、これ在

もんもんくく

よ

かれ

しようじき

り、これは文々句々ことごとくこれを読む。彼は正直の

みようほう

な

か

いつしんさんがん

な

だいほう

妙法の名を替えて一心三觀と名づく。ありのままの大法に

たいごん

ほう

に

しん

ぼう

かれ

あらざれば帶権の法に似たり。これは「信も謗も彼もこれ

けつじよう

ぼだい

じよう

なんみようほうれんげきよう

とな

も決定して菩提を成ぜん」と南無妙法蓮華經と唱えかく。

かれ

しよしゆう

みようぎ

か

あらわ

ごんぜつ

彼は諸宗の謬義をほぼ書き顯すといえども、いまだ言説

しんみよう

お

たし

じやぎ

ただ

さんるい

ごうてき

せず。これは身命を惜しまず他師の邪義を糾し三類の強敵

まね

かれ

あんらく

ふげん

せつそう

よ

かんじ

ふきよう

を招く。彼は安樂・普賢の説相に依り、これは勸持・不輕の

ぎようそう

もち

かれ

いちぶ

しようれつ

た

いちぶ

しやく

行相を用いる。彼は一部に勝劣を立て、これは一部を迹

つた

かれ

おうぶつ

域

引

じゆりようほん

もんてい

と伝う。彼は応仏のいきをひかう。これは寿量品の文底を

もち

かれ

おうぶつしようしん

じじゆゆうほうしん

いちねんさんぜん

いつしんさんがん

用いる。彼は応仏昇進の自受用報身の一念三千・一心三觀、

くおんがんによ

じじゆゆうほうしん

むさほんぬ

みようほう

ただ

これは久遠元初の自受用報身の無作本有の妙法を直ちに

とな

唱う。

じんい

しやつけ

しゆ

ふげん

もんじゆ

かんのん

やくおうとう

これらの深意は、迹化の衆、普賢・文殊・觀音・藥王等の

だいぼさつ

ふぞく

だいじ

し

大菩薩にも付嘱せざるところの大事なれば、知らざるところ

ひほう

ぼんし

ろの秘法なり。いわんや凡師においてをや。

まつぽう

ほんじやくいっち

しゆぎよう

しよけとう

もし末法において本迹一致と修行し、所化等に

おし

もの

わ

み

いぎやくざい

つく

むけん

お

教うる者は、我が身も五逆罪を造らずして無間に墮ち、そ

ずいじゅう

輩

あび

しず

うたが

れに随従せんともがらも阿鼻に沈まんこと疑いなきもの

しよ

いつけん

ひとびと

り

ふげん

ち

もんじゆ

いちごん

なり。この書、一見の人々は、理〈普賢〉・智〈文殊〉一言の

さつた

しやうじぜつだん

きわ

じやうこうかくご

だいぼさつ

でんきやうい

薩埵、生死絶断の際、定光覚悟の大菩薩なり。伝教云わ

もんじゆ

りけん

ろくりん

つう

じゆうに

しやうるい

せつだん

いっとう

く「文殊の利剣は六輪に通じ、十二の生類を切断す。一刀

みやうほう

くだ

まんぼう

ちよく

じねん

さんたい

い

〈妙法〉を下して万方に勅するに、自然になお三諦を出だ

けんもんかくち

あき

いちごん

さんさい

しめ

いちごん

す。見聞覚知に明らかなり。この一言の三際を示すに一言に

みだつ

もの

いちじゆ

だいまく

ひら

さんばん

さんたい

しかず。もし未達の者も一頌〈題目〉を開くに三般〈三諦〉

おな

つう

し

しやう

ぶつおの

いちげん

同じく通ぜざることなし。知んぬ、生・仏自ずから一現な

いちごん

みやうし

いつきやう

げんぎ

い

うんぬん

てんだい

る、これを一言の妙旨、一教の玄義と謂う」云々。天台云

いちごんさんたい　せつなじようどう　はんげじようどう　うんぬん　でんぎようい

わく「一言三諦・刹那成道・半偈成道」云々。伝教云わ

ぶっかい　ち　くかい　きよう　くかい　ち　ぶっかい　きよう

く「仏界の智は九界を境となし、九界の智は仏界を境と

きようちたが　みようくん　ぼんしようじようごう　せつな

なす。境智互いに冥薫して凡聖常恒なる、これを刹那

じようどう　い　さんどうそくさんとく　さと　しよあく　しんぜん

成道と謂う。三道即三徳と解れば、諸悪たちまちに真善な

はんげじようどう　な　いま　えしやく　い　もろもろ

る、これを半偈成道と名づく。今、会釈して云わく、諸

ぶつぼさつ　じようこうざんまい　ぼんしよういちによ　しようどう　せつな　はんげ

の仏菩薩の定光三昧も、凡聖一如の証道、刹那・半偈の

じようどう　わ　け　しようれつしゆぎよう　なんみようほうれんげきよう　いちごん　おさ

成道も、我が家の勝劣修行の南無妙法蓮華經の一言に撰

つ

め尽くすものなり。

けつみやく　つら　まつだいせんがく　もの　よ

この血脈を列ぬることは、末代浅学の者の予が

かな しょうそく べつじよ てんだい かんじ しかん み がんもく まよ

仮字の消息を蔑如し、天台の漢字の止観を見て眼目を迷わ

しんい きようどう かな かんじ な

し、心意を驚動し、あるいは仮字を漢字と成し、あるいは

しかん めいじよう ぜんだい き

「止観の明静なることは、前代にいままだ聞かず」の見に耽

ほんじやくいっち おも な わ ないしよう じゆりようほん し

り、本迹一致の思いを成す。我が内証の寿量品を知らず

しかん おな じけん びやつけん もと よ りゆうぎ

して止観に同じ、ただ自見の僻見を本として、予が立義を

はしつ あくどう お ゆえ てんだいさんだいししようしよ おくでん ぞく

破失して悪道に墮つべき故に、天台三大章疏の奥伝に属し

てんだい でんぎようとう ひ たま しようぎ しようじいちだいじ ひでん か

天台・伝教等の秘し給える正義、生死一大事の秘伝を書き

あらわ たてまつ おそ あ はばか あ

顕し奉ることは、かつは恐れ有り、かつは憚り有り。

こうせんる ふ ひ こうてい まさ ひらん たてまつ

広宣流布の日、公亭において応にこれを披覧し奉るべし。

えつう くわ

こうせんる ふ

まつだい

会通を加うることは、かつは広宣流布のため、かつは末代

せんがく

てんだい

でんぎよう

しゃくとう

よ

しんじつ

浅学のためなり。また天台・伝教の釈等も、予が真実の

ほんかい

みらいように

でしとう

かれ

ほんかい

おも

本懐にあらざるか。未来嬰兒の弟子等、彼を本懐かと思う

べきものか。

い

ぶんえい

めんきよ

ひ

にぜん

しゃくもん

ほうぼう

たいじ

去ぬる文永の免許の日、「爾前・迹門の謗法を対治

ほんもん

しょうぎ

た

ふじつ

ほうさい

もう

し、本門の正義を立てらるれば、不日に豊歳ならん」と申せ

き

ひと

した

ふ

みみ

ふさ

とき

かとうど

しかば、聞く人ごとに舌を振るい、耳を塞ぐ。その時、方人

いちにん

な

ゆいが

にちれん

よが

にっこう

一人も無く、唯我〈日蓮〉与我〈日興〉ばかりなり。

と

い

じゆりようほんもんてい

だいじ

ひほう

問うて云わく、寿量品文底の大事という秘法、いかん。

こた い ゆいみつ しょうほう ひ
答えて云わく、唯密の正法なり。秘すべし、秘すべし。

いちだいおうぶつ

域

引

かた

り

うえ

ほつそう

一代応仏のいきをひかえたる方は理の上の法相なれば、

いちぶとも

り

いちねんさんぜん

しやく

うえ

ほんもんじゆりよう

とく

一部共に理の一念三千、迹の上の本門寿量ぞと得意せし

だつちやく

もん

うえ

もう

もん

そこ

むることを脱益の文の上と申すなり。文の底とは、

くおんじつじよう

みようじ

みようほう

よぎよう

じきだつ

しょうがん

久遠実成の名字の妙法を余行にわたさず、直達の正観、

じぎよう

いちねんさんぜん

なんみようほうれんげきよう

ごんじつ

り こんにち

事行の一念三千の南無妙法蓮華經これなり。権実は理へ今日

ほんじやく

り

ほんじやく

じ

くおん

ほんじやく

じ

の本迹の理なり、本迹は事へ久遠の本迹の事なり。

ごんじつ

やくちやつきよう

いちだいおうぶつ

ほんじやく

ほんじやく

名字身

やくしん

また権実は約智約教へ二代応仏の本迹へ、本迹は約身

やくい

くおん

ほんじやく

い

だつ

げん

あ

約位へ久遠の本迹へ。また云わく「脱は現に在りといえど

ほんしゅ あ

しゃくそん くおんみょうじそく

も、つぶさに本種を騰ぐ」といえり。釈尊、久遠名字即の

くらい おんみ しゅぎよう

まつぼうこんじ にちれん みようじそく み うつ

位の御身の修行を、末法今時の日蓮が名字即の身に移せ

り ぞうさ

ゆえ てんしん い しょうち えんみよう

り。「理は造作にあらざるが故に『天真』」といひ、証智は円明

ゆえ どころろ

い ぎようぎ ほんもんりゅうぎよう けつみやく

なるが故に『独朗』と云う」の行儀、本門立行の血脈、

しる ひ

これを注す。秘すべし、秘すべし。

にちもじ くだん うぶゆ くけつ にか りようだいし

また日文字の口伝と産湯の口決の二箇は両大師の

げんし 当 ほんぞんしちか くだん しちめん けつ

あらわ

玄旨にあつ。本尊七箇の口伝は七面の決にこれを表す。

きようけぐきよう しちか でん ぐつうしや たいよう けつみやく

教化弘経の七箇の伝は弘通者の大要なり。またこの血脈な

ほんぞん だいじ にちれんちやくちやくぎす でんぼう しよ とうちゅうそうじよう

らびに本尊の大事は日蓮嫡々座主伝法の書、塔中相承

ほんじよう

ゆいじゆいちにん

けつみやく

あいかま

あいかま

ひ

の稟承、唯授一人の血脈なり。相構えて相構えて、秘す

ひ

つた

ほつけほんもんしゆうけつみやくそうじようお

べし秘すべし、伝うべし。法華本門宗血脈相承畢わんぬ。

こうあんごねんたいさいみずのえうまじゆうがつじゆういちにち

にちれん

かおう

弘安五年太歳壬午十月十一日

日蓮

花押